

## 19 戊辰戦争当時東北地方に出没した スネル兄弟について

問 山形県立図書館の御協力で、戊辰戦争当時東北地方に出没していたスネル兄弟について調査しているものですが、こちらでは解明できない疑問点が出てきました。下記の事項についてよろしく御指導下さい。

1. 庄内・米沢両藩関係の文書の中に、スネル兄弟との並々ならぬ関係を記しているものがあり、その関係で御地仙台・塩釜・寒風沢方面に出張していった人々の記録が散見されます。その中に屢々「仙台二軒茶屋」というものが現われてくるのですが、それはどこにあったもので、どんなところだったのでしょうか。一例に、慶応4年7月10日、仙台二軒茶屋において、フロイス人ライスネルと米沢・会津等の使臣が、鉄砲売買の契約などを行った記録があります。このように諸藩との取引があったのですから、地元仙台藩とライスネルとの間には当然大口の取引があったと推察されるのですが、いかがだったのでしょうか。
2. 酒井藩〔庄内藩〕を代表して本間外衛が、オランダ人エドワードスネル等と取り結んだ兵器取引の契約書の中に、現物は酒田港で受渡しする、戦禍が及んでそれができなかった場合は仙台で受渡しをするとしてあるものがあります。エドワードスネル等も仙台・塩釜あたりを舞台としていたものと推察されますが、どの程度の金額、どれ位の数量の取引をしていたのでしょうか。
3. 慶応4年7月10日フロイス人ライスネルが仙台に上陸したことを、仙台出張中の日記に記している庄内藩士がいます。このライスネルと、オランダ人スネルとの間には、何か関係がありそうに考えられるのですが、御教示を得たいと存じます。
4. 寒風沢に、置賜商人の桂屋喜助、石黒某等が生糸、蚕卵紙<sup>(2)</sup>などを持出して、外国船と取引していた事実を伝える記録がありますが、この寒風沢港<sup>(2)</sup>というのは、どの程度の規模の港だったのでしょうか。また脱走軍艦を引きつれた榎本武揚なども、ここに寄港していることを書いたものもあります。どうだったのでしょうか。
5. 元木省吾氏の「北方渡来」の中に戊辰9月19日、榎本武揚が、平松武兵衛と称したプロシヤ人<sup>(3)</sup>スネルと共に塩釜にきたことを書いてあると教えてくれた人がいます。榎本等の行動については、御地などでは詳しくおわかりのことと存じます。武揚とプロシヤ人武兵衛とが塩釜に同行したのは、何の理由からでしょうか。
6. これも人づてなのですが、「河井継之助伝」に、明治元年の9月24、25日頃、寒風沢出帆の外人スネルの船に便乗して、長岡藩の世子等が留学のため渡米する目的で、乗船はしたが、旅費や学費の不足から、遂に渡航を断念して下船したということが書いてあると知らせてくれた人がいます。このことについて、私は外人スネルが帰国しようとして寒風沢で船に乗ったという

事実に注意をひかれたのですが、これについて、もう少し詳しいことが知りたいのです。そしてこのスネルというのは、プロシヤ人スネルなのか、オランダ人スネルなのか、或はヘンリースネルなのか、エドワルドスネルなのか、また、彼が寒風沢を出帆したのは何月何日ですか。

7. 慶応4年8月13日頃、寒風沢には、元老中板倉静勝が潜伏していたようですが、この板倉に対し、庄内にいたスネルが手紙を出しているのです。その内容は不明ですが、手紙を受けた板倉が相当あわてていたことを、その場に居合わせた者から米沢藩士に通報しているのです。当時板倉は、この寒風沢で何をしていたのでしょうか。

答 第一に、小主題を解明するには、全般的な理解が基礎になりますので、幅広い読書が必要であること、次に、人づての情報や聞き覚えなどを個々無差別にとり入れると、本筋を見失い勝ちになるものであること、これらは大いに留意すべきことであります。

さて、スネルは、幕末戊辰の動乱に乗じて、大量の武器を売りまくった稀代の「死の商人」で、容易にその正体をつかめる人物ではありません。殊に、スネルという人物は、単独の1人とも、兄弟2人とも、或いは国籍のちがう同名複数人とも伝えられています。このため一層の不可解さがつきまとっているのです、何よりもこの点を整理してかかることが、その行動を理解しようとする上で最も肝要であります。

「死の商人」スネルは、実は3人の兄弟だったのです。横浜の開港は安政6年〔1859〕でしたが、彼等3人はその後間もなく、プロシヤ領事に随行して来日しているようです。スネル3兄弟はプロシヤ生れで、姓はガルトネル。長兄ガルトネルはスイス領事館書記官、次兄のエドワルドガルトネルは、ガルトネル姓を自らオランダ風にスネルと呼びかえ、プロシヤ領事館事務官、後にオランダ領事、末弟コンアートガルトネルは箱館〔後の函館〕のプロシヤ領事の職につきながら、横浜44番館にパテケ・スネル商会を設立し武器貿易を拡大して行きました。幕末開国当初に來任した外国領事やその随員は、本来の公務の傍ら、対日市場確保の使命の一端でもあったろうか、私的な貿易商として商才を発揮する者が多かったようです。3兄弟もその例にもれず、長兄ガルトネルは横浜本社、末弟コンアートガルトネルは箱館を拠点に武器の仕入輸送に当り、エドワルトスネルが奥羽越諸藩に大量売込みを続けたのでした。このエドワルトスネルこそが、東北の戊辰史に「死の商人」として出場してくるスネルなのであります。

スネルはもともとプロシヤ武官でもあったので、来日当初幕府のお雇い軍事教官として赤羽に住んで、「アカハネスネル」と自称したこともあります。後に彼は会津藩に召し抱えられたと称し、丸に葵の紋付羽織に袴を着用、大小を帯び、自ら平松武兵衛と名乗ったり、また通訳兼番頭として会津藩士田中茂手木（もと六三郎）を側近に従えるなど、スネルは深く会津藩に食い入り、横浜の外人筋では、彼を会津の大蔵大臣スネルと呼んだこともありました。狡猾無類のスネルが、南北戦争などの廃銃を売込み、機敏に諸藩の機密を握り足許につけ入るような増長ぶりを発揮している中で、スネルを利用すること最も巧みであったのは、独り長岡藩の英傑河井継之助でした。河井は、

日本に輸入された唯3門の最新鋭ガットリング機関銃（200～300発の連発銃）を2門まで、スネルから入手しています。戦火をくぐって、縦横に暗躍し、莫大な巨利をむさぼる「死の商人」スネルは、保身のためプロシヤは勿論のこと、オランダ・イギリス・フランス・イタリア等数か国の国籍を巧妙に使い分ける知能も備えていました。記録により、まちまちの人物として浮び出ているのもそのためです。

慶応4年〔1868〕5月30日、新潟奉行所から米沢藩が市政権を獲得し、米沢は仙台・会津・庄内4藩との共同管理機関、新潟会議所を設置しました。時あたかも、北越方面は西軍との戦線が膠着しつつあった頃でした。それ以後7月の終りまで、新潟は同盟軍の占領地内に確保され、その軍需補給港として、重大な役割を演ずることになりました。これに先だち、5月12日には、オランダ領事と自称したスネルが、いち早く新潟に上陸し、白山の寺院を借受けて居留する旨を奉行所に届け出ています。スネルは、ここを拠点として、武器売込みに狂奔することになりました。スネルが、新潟港に陸揚げして同盟諸藩に供給した武器類の総額は不明であるが、米沢藩に売込んだ小銃、火薬などの合計金額だけでも11万6千6百ドルにのぼるといわれます。庄内藩には酒田港があり、仙台領には寒風沢港があるので、新潟港に依存したのは、主に会津と米沢の2藩でした。スネルは「死の商人」の本領をむき出しに、会議所に入入りしては政治上、軍事上の強力な発言をしているようです。仙台藩の横尾東作が横浜に携行した11か国公使・領事宛厳正中立要請の書簡も、彼の發議によるものでした。また、白石で徳山四郎左衛門と変名していた元老中板倉伊賀守を、新潟の外交事務総裁に迎えることになったのも、スネルの意見に基づいたものです。或いは、サイゴンで外人部隊が同盟側への参戦の機をうかがっているから輸送船を出して迎え入れるべきだと、会議所の重役を躍らせるなどしています。その間にも、スネルは諸方に出没しており、会津で鉾山を視察したり、「物産見立」のため米沢へ赴いたこともあり、これは武器代の見返りその他の利権をねらったものだともいわれます。「仙台戊辰史」にも、『九月九日〔慶応4年〕プロイスの副将スネルナルモノ登城〔仙台城〕軍事上ノ建言ヲナス』という記事があり、スネルはこのような大胆な行動を敢行しています。外国事情にうとい同盟諸藩は、彼を増長するにまかせながら、絶大な信頼感をもっていただいていたものであります。7月29日、新潟は西軍に占領されてしまったが、スネルはその前日まで、チャーターしたイギリス船2隻によって、武器補給を続けました。遂にスネルとその部下数人は西軍に逮捕され、4万7千ドルほどの武器、現金も押収されたが、オランダ領事としての身分に物言わせ、間もなく釈放されました。途端にスネルは西軍に対し10万両の損害賠償を要求し、全額を支払わせています。そして、その後も横浜や箱館の兄弟と連動しつつ、「死の商人」として活動しました。やがて、内戦が終結してからもスネルは日本に在留しています。そして、明治2年5月、アメリカ移住を志す会津人〔20人とも30人とも明らかではない〕をひきい、カリフォルニア州のゴールドヒルに入植、「ワカマツコロニー」を作ったが、2年目に失敗に終り、入植者は離散し、スネルは帰国したと伝えられます。しかし、渡米してからもいくたびか日本との往来が

あり、明治3年に横尾東作が、東京築地に彼を訪問している事実があります。また、事業家・利権屋としてのスネルの足跡の一つが「神仏分離史料」第1巻（村上專精〔等〕編）に次のように記されていることから知ることができます。『明治3年10月に、長昌院霊屋は7千6百56両、お七方霊屋は1万4千7百60両1歩で、西洋人スネルと云う者に売却し……今日寛永寺にその詳細の記録が存してある。』

以上スネルについて知られていることを、資料に基づいて総説した上で、おたずねの疑問点毎に下記の通り補足いたします。

1. 仙台北下町の新寺小路の東郊で、宮城野原を南北に通ずる東街道〔あずまかいどう〕の西側に沿う南目村分に、幕末頃、大久保屋・鹿島屋（金華亭）という2軒の茶屋がありました。これを二軒茶屋と呼んだのです。なお、これにちなんでこのあたりの小字名を二軒茶屋と称するようになりました。東街道は中世国府多賀城に通じた官道だったが、仙台開府後は、煩雑な城下町を通過することなく、その外側を直進する簡便な最短コースとなっていました。幕末の風雲が急をつけると、南の白石・福島方面、北は塩釜・松島・寒風沢へと急務を帯びた人馬の往来が、にわかにあわたしくなったのは当然のことでした。嘉永6年〔1853〕6月建立の原町若竹地点の道標に、『南 長町宮城野<sup>(4)</sup>いてふ道 一里』『北 塩かま松島 三里十九丁 六里十五丁』と刻まれているのが、そのことを物語るものです。城下中部の東端と東街道いてふ道との接点附近に二軒茶屋が建って繁昌し、時には他藩の使臣がスネル等との商談の場とするには、地の利を得た恰好なところだったのです。仙台の大口武器購入は、横浜に担当者をさし向けて行われ、後にはスネル等からの売込みもありましたが、特に他藩の場合のように、二軒茶屋を商談の場所としなければなかったことはなく、そのような資料もまたありません。

なお、「フロイス人ライスネル」とありますが、フロイスという国は存在せず、またライスネルという商人も知られておりません。外国語の聞き取り、表記にうとく不慣れなための「プロシヤ人スネル」の誤りと考えられます。

2. 当時の海上輸送ルートは、横浜→仙台沖（寒風沢港）→津軽海峡→日本海→酒田港→新潟港でした。日本海の制海権は西軍の手中に入り、その進撃とともに、このコースを逆におさえながら北上することは、当然想定されることです。予め第二の受渡港を設定したのはこのためです。スネルは新潟を拠点としていたことは上記の通りで、仙台辺には必要の都度現われているようですが、彼の営業状態など知るべくもないことで、取引額を示す資料などはありません。

3. 「フロイス人ライスネル」は実在せず、「プロシア人スネル」の誤記であること、上述の通りです。

4. 寒風沢は松島湾の外洋側の一小島で、藩政時代は大型和船の寄港場でした。仙台領沿岸には良港がなく、海上輸送用の大型船の接岸できるのは、古来「冬寒風沢、夏小淵」といわれ、この寒風沢と牡鹿半島の小淵〔こぶち、旧大原浜〕の2港ぐらいなものでした。寒風沢と塩釜又は荒浜

間は小舟輸送でリレーするほかはなく、出入の貨物は直送できないので一旦ここに荷揚げして、積替えを行ったものです。安政4年（1857）仙台藩初の西洋型軍艦開成丸の建造もここで行われました。また慶応4年8月26日、榎本武揚の率いる旧幕艦隊がここに投錨<sup>(5)</sup>して、10月上旬まで碇泊していました。「死の商人」の外国船も、専らここに出入していたものです。

桂屋喜助とは、後に大倉財閥を築いた大倉喜八郎が米沢城下に設けた出店です。喜八郎は、越後新発田から江戸に上り、商人としてたたき上げるが、幕末動乱に乗じて「死の商人」に転身、彰義隊をはじめ国内諸藩へ懸命に武器を売込みました。米沢に出店を設けたのは、国外に名声の高かった米沢産の生糸や蚕種を大量収荷して寒風沢から横浜に積出し、一方横浜から入手した小銃や弾薬を上杉家に売付けて巨利をあげるためでした。桂屋はその商用で寒風沢に来ていたのです。

5. 榎本武揚は寒風沢に入港してから、旧幕軍隊は寒風沢・塩釜・松島・石巻等に分屯させます。そして、彼自身は仙台北国分町の外人屋に滞在して、脱走旧幕軍と仙台藩あげでの徹底抗戦を促し、仙台藩の降服後も極力画策をつづけていました<sup>(6)</sup>。しかし、仙台藩の再起も見込めなくなったので、9月19日、20日頃彼は仙台を退去して寒風沢に向いました。塩釜はその途中です。この時、スネルもまた同地に現われていますが、強いて両者の同行を理由付ける資料はありません。榎本の胸中には北海道転進の決意があり、スネルにはあくまで「死の商人」の行動目的があっただけとするのが自然です。
6. 北越戦線において、最も果敢に勇戦した長岡藩が敗れ、総指揮の河井継之助が、慶応4年8月16日、会津領内で陣歿しました。藩医小山良運が、河井の遺志に基づき、世子牧野鋭橘を擁護し継之助の子忠太郎ほか少年数名を付添わせ、寒風沢から外国船に乗船フランスに亡命留学させようとしたが、費用不足のため不成功に終わってしまったのは事実です。丁度、スネルの長兄ガルトネルが帰国することになっていたため、彼にその一切を託そうとしたのでした。スネル〔エドワルトスネル〕の名でこのことが伝えられているのは誤りであります。寒風沢にはまだ榎本艦隊が碇泊中の明治元年9月24、25日頃とされているだけで、仙台は当事者でもなく、且つ敗戦直後の混乱時でしたので、出港月日を正確に記録した資料などは存在しません。
7. 元老中板倉伊賀守勝静〔備中松山5万石の藩主、徳山四郎左衛門と変名〕は、同じく元老中小笠原壱岐守〔中山寛助また静翁と変名〕と共に7月初めから白石におり、奥羽越列同盟の主導権を握り、12日には輪王寺宮を迎えて側近にあり、同盟公議府を主宰していました。7月下旬、板倉は外交事務総裁として新潟会議所へ赴任の途中、29日同地が陥落したので引返しています<sup>(7)</sup>。8月に入ると南境の戦線は次々と突破され、後退する将士は仙台北城下へ雪崩こみ始めました。一方新潟失陥に引つづき8月11、12日には村上城が陥落して、北越方面は西軍の攻勢に完全制圧されてしまいました。スネルが庄内にいたのは、新潟で西軍に逮捕、釈放された直後のことです。板倉が寒風沢で、スネルからの手紙を受けたのは、このような状況のときでした。板倉が、たま

たま寒風沢に来ていたのは何のためであるか不明ですが、御来書にあるような潜伏行動をとっていたものではありません。

注(1) 明治維新の明治元年〔慶応4年9月8日改元〕の干支〔えと〕が戊辰なので、この年から翌年にわたる政府軍と旧幕府側との戦争を総称して、このように呼ぶ。薩摩・長州藩を中核とする倒幕派の挑発により、慶応4年1月3日鳥羽・伏見の戦が起り、政府軍の江戸進撃は、徳川氏の恭順により無血江戸開城となり、彰義隊の抵抗もあったが鎮圧された。しかし、仙台・米沢など東北諸藩は薩長の専横に憤激して、奥羽越列藩同盟を結んで抗戦したが、同盟諸藩は次々と敗れて降服した。箱館を占拠した榎本武揚らの旧幕海軍も、翌明治2年5月13日降服して旧幕勢力は一掃され、倒幕派の藩閥〔明治政府の指導権を握った薩摩・長州・土佐・肥前4藩出身者による排他的結合〕による明治新政府の基礎が確立された。

注(2) 当時、蚕の病気にあえぐ養蚕国イタリアは、日本からの蚕種の供給に大きく依存していた。

注(3) プロイセン。ドイツの最も強大な一王国であった。後にドイツ統一の核心をなした。

注(4) 「長町」は行先。「宮城野いてふ道」とは、宮城野原西北端に有名な姥銀杏〔乳銀杏ともいう〕があり、樹齢約千年、高さ32m、幹囲8m〔大正15年国指定天然記念物〕の太木で遠方からも望見できる目標物で、東街道はこの銀杏近くに沿っていたのでこのように呼ばれたのである。

注(5) 仙台藩では、海軍力強化のため、安政3年〔1856〕8月26日、江戸の造船技術者三浦乾也〔けんや〕を招き、寒風沢において軍艦建造に着手、翌4年7月14日完成。「易経」の『開物成務』をとって開成丸と命名した。長さ約33m、幅約7.5m、大砲9門を装備した2本マストの洋式軍艦であった。江戸まで回航したこともあったが、間もなく座礁事故を起して廃艦となった。寒風沢に「寒風沢造船碑」が建っている。

注(6) 奥筋の諸侯の参勤途中の宿泊のため仙台城下に設けた本陣をこのように称した。外人屋の称呼は「義山公治家記録」巻之3、寛永18年〔1641〕11月5日条に初見。もと大町頭にあったが、元禄頃から国分町に移され、国分町上席検断米川十右衛門家がこれを兼ねた。なお、脇本陣は南町に置かれ、国分町の中程には宿屋が軒を並べていた。

注(7) 伏見宮邦家親王の第9王子として、弘化4年〔1847〕2月御誕生、嘉永元年8月仁孝天皇の御猶子となり、安政5年11月御得度、法諱を公現と称せられた。翌年2月江戸東叡山に入られた。慶応4年〔1868〕彰義隊の戦争で上野を焼かれた親王は会津にのがれ、更に米沢を経て7月2日仙台入りをされた。仙岳院に入られた22才の宮は、奥羽越列藩同盟に推戴され、やがて樹立されるべき「真勤王政府」の首班につかれることになっていた。このことについては「宮城県の歴史」（高橋富雄）・「戊辰戦争の分析」（遠藤進之助。「東北史の新研究」の内）参照。しかしながら、奥羽越諸藩は次々と西軍に屈服してしまった。宮は10月12日仙台を出発して東京に向かわれた。その後謹慎を解かれた宮は、明治2年から10年までドイツに留学、その間

に北白川宮家を継がれた。12年歩兵中佐に任官、25年には中将に進み、第6、第4師団長を経て28年1月近衛師団長に補せられた。日清戦争が勃発すると満洲戦線に参加された。28年終戦となったが、帰還のいとまもなく引続き台湾守備の命を受けて転進された。島内平定を進められるうち病に侵された。酷烈な風土の中で、病苦を押しなおも諸軍の指揮を続けられたが、遂に10月28日薨去された。

資料 仙台戊辰史（藤原相之助）  
横尾東作伝（河東田経清）  
維新の内乱（石井 孝）  
東北の歴史下巻（豊田 武編）

## 20 個々の家の系図

- 問 1. 私の先祖は八幡氏に仕え、八幡氏没落後は留守家の家臣〔陪臣〕となって幕末に至ったと聞いています。私の家の系図をお知らせください。
2. 伊達家直参だったH家の者です。私の家の系図を御教示ください。
3. 私の家の祖先は、源義家から神官に命ぜられたと聞いています。私の家の系図を教えてください。
4. [その他同様の問多数]

答 図書館は、図書資料に基く奉仕を提供する機関ですので、その機能には限界があります。一家の系図の提供など、図書館の取扱わない事項の一つとしています。その理由は、申しあげるまでもなく、個々の家の系図そのものを、図書館が所蔵していないからであります。系図とは、「一家の祖先から代々の系統を書き記した表」であって、家長から家督相続者へと、その家<sup>(1)</sup>のみ伝承される尊厳にして唯一のものであります。また、本来はプライバシーにかかわる重要事であり軽々にこれを複製して公表したり、刊行したりするものではありません。従って、それらを一々図書館が入手することなどは、あり得ないことです。

特別な場合、系図調査の手がかりや、補助となる資料ならば、皆無というわけではありません。伊達家の世臣すなわち禄100石以上の直臣1,119家及び医員110家について、祖先からの主なる事績を書きあげさせたことがあります。それを編纂したものに「伊達世臣家譜」があります。ただしこれは系図そのものではないことと、この書きあげ時点から現在まで、約150年<sup>(2)</sup>の空白期間があるという点は注意しなければなりません。